

空襲回数日本一の浜松

大都市空襲を終えたアメリカ軍の次の目標は、中小都市の爆撃であった。

第1回目のターゲットは、軍需産業都市鹿児島・大牟田・浜松・四日市である。

初空襲・焼夷弾

浜松市民が初めてB 29を見たのは、1944年(昭和19)11月1日の白昼であった。

同年12月7日、東南海地震。
12月13日、浜松初空襲。1機のB 29で、613発の焼夷弾の攻撃。以後、空襲の日々が続いた。

公式空襲・34回

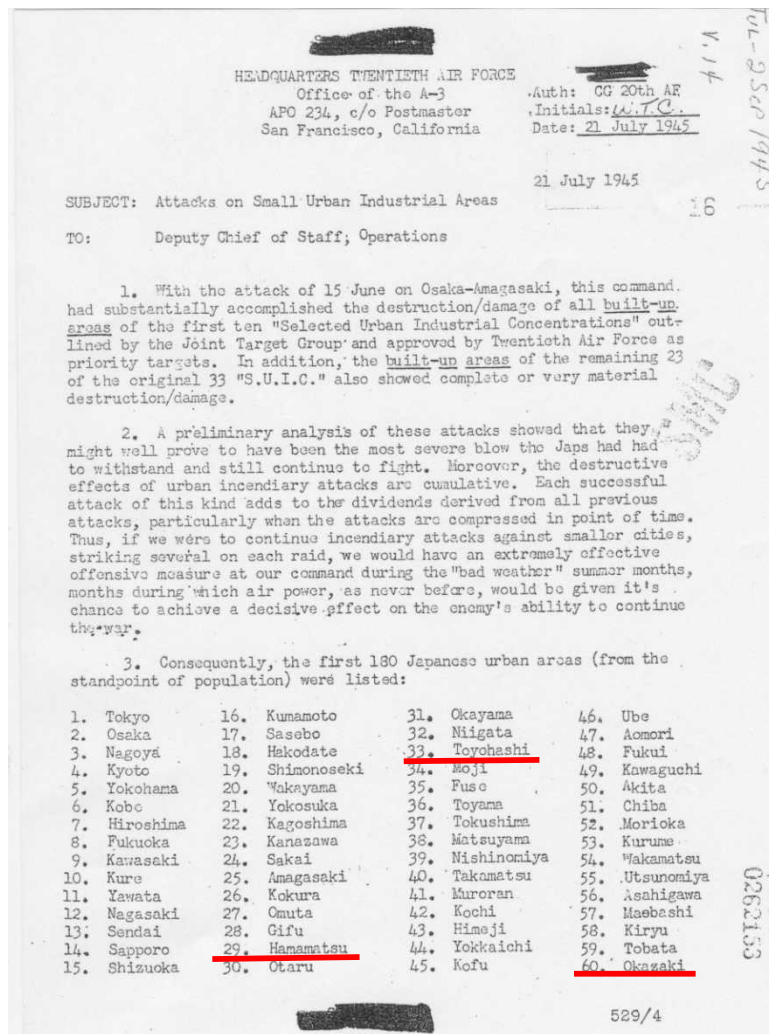
1944年12月 2回
1945年 1月 3回
2月 6回
3月 1回
4月 3回
5月 5回
6月 5回
7月 8回
8月 1回

日米の記録のくい違いあり。
実質は、もっと多いという。

なぜ、浜松が多いのか？

浜松が狙われたのは、①軍施設飛行場があった②軍需工場が多い(日本3大鉄工場をはじめ、プロペラ造りのヤマハ工場など)③マリアナ・硫黄島基地から直線上にあり、標的にしやすい。④他都市へ空襲終了後のB 29が余った爆弾を浜松へ落とし帰路についた、などの理由による。

焼夷弾・機銃掃射・250キロ爆弾・パンプキン爆弾・艦砲射撃など、原爆以外のあらゆる攻撃を受け、浜松は焦土と化した。



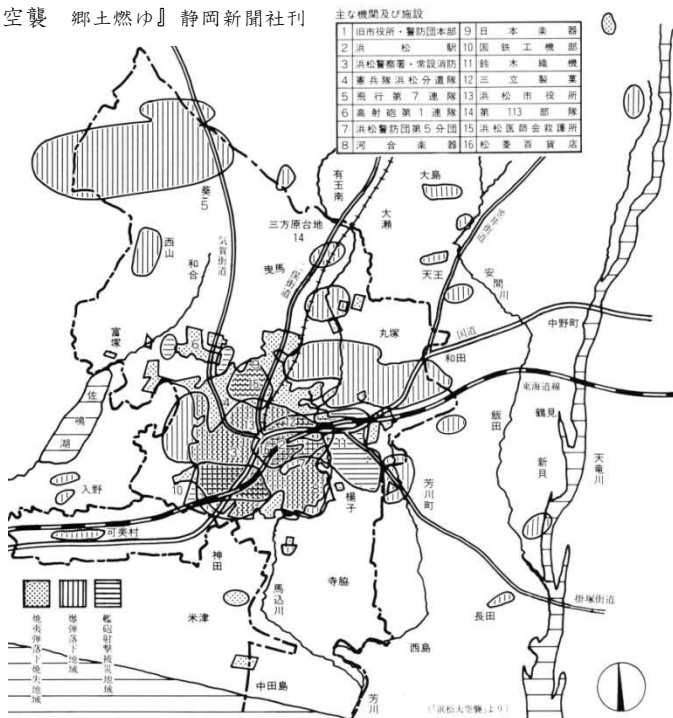
『アメリカ軍機密文書：空襲目標180都市』アメリカ公文書館蔵
大都市名の後に29浜松、33豊橋、60岡崎の名がみえる。

焦土と化した浜松
『大空襲 郷土燃ゆ』
静岡新聞社刊
池谷晃司氏撮影



当時の浜松市域戦災被爆地図

『大空襲 郷土燃ゆ』静岡新聞社刊



浜松空襲の実態

空襲の多かった浜松。特に大被害だったのは、2月16日・4月7日・4月30日・5月19日・6月18日・7月29日。

2月16日・17日、硫黄島上陸作戦準備攻撃・浜松飛行場攻撃目標

1945年(昭和20)2月16日・17日。アメリカ軍の硫黄島上陸作戦準備攻撃と日本の制空権を奪うため、浜松飛行場を攻撃目標に定めた。B29, 6機で7,324発の焼夷弾を落とした。

3月25日、硫黄島占領。本土への攻撃が激化した。

6月18日、浜松大空襲・中小都市爆撃1番目

多い空襲中、特筆すべきは1945年(昭和20)6月18日。大都市から中小都市へと焼夷弾攻撃作戦第1号都市浜松の空襲である。約100機のB29, 焼夷弾65,000発投下。レーダー使用の夜間攻撃で、市内70%が焼失。

艦載機からの機銃掃射

航空母艦から出撃したグラマン機による機銃掃射は、低空飛行で攻撃目標をねらった。襲撃してくるパイロットの顔と銃に手をかける姿が見えたという。

7月29日、艦砲射撃の恐怖

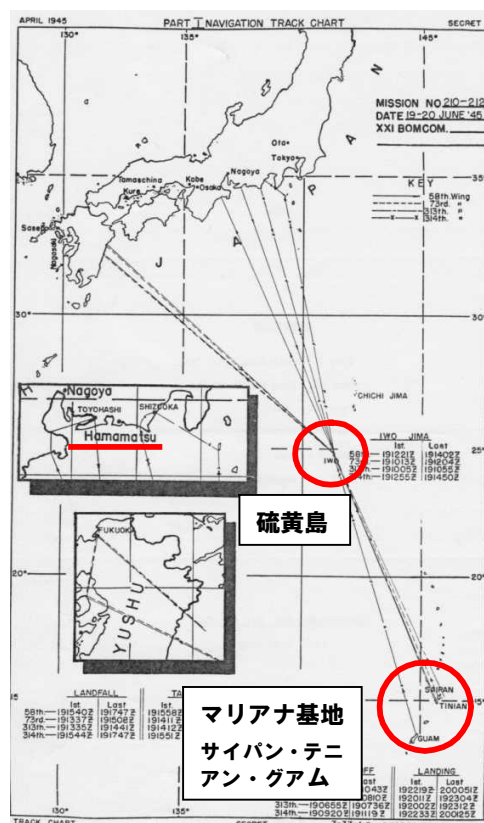
とどめは、7月29日の艦砲射撃であった。沖縄戦終了。アメリカ軍は、日本の制空権・制海権奪取作戦を立てた。

8隻の軍艦から砲弾2,160発による1時間の攻撃。それまでの空襲と違い、爆発音も爆発力も破壊力も、けた違いであった。人々の心はすっかり萎えてしまった。

8月1日、最後の浜松空襲

長岡を空襲する内の1機が焼夷弾500発投下。これが浜松最後の空襲であった。

しかし、その後も、警戒警報・空襲警報は発令され、人々は身を縮めて生活した。睡眠不足・食料不足・家屋破壊・多くの肉親の死…。死と背中合わせの生活が続いた。人々は、生活に疲れ、平和の到来を切に求めるようになった。



『6月18日マリアナ〜硫黄島〜本土爆撃のアメリカ軍航路図』:アメリカ公文書館蔵

かんぼうしゃげき 浜松空襲（艦砲射撃）の恐怖・越山美代子さんの場合

越山さんは1935年（昭和10）生まれ。父は大蔵省勤務。函館・仙台・熊本・中国・東京を転勤し、終戦。

越山さんの戦争体験は、函館から始まる。郷里浜松で空襲。

純粹で多感な少女の願いは、安眠・満腹・ゆったりとした入浴だったという。10歳で終戦。激動の昭和を体験し、戦争の悲惨さと平和の尊さを次代に伝える大切さを語る。



伝える大切さを語る越山さん

1940年（昭和15）函館・防空演習の記憶

1940年（昭和15）函館。函館税関官舎一体となり、初めての防空演習が行われた。

防火訓練
『浜松大空襲』
戦災を考える会刊



初めてだったので、何をやればよいか分からず、各戸1人、とにかくバケツと竿先に縄付きの消火用「火叩き」を持参した。

なぜ、函館で演習を始めたのか？ソ連からの攻撃に備えるためだったといわれる。

1941年（昭和16）仙台 アメリカと開戦・九軍神の歌

仙台に転勤。「尋常小学校」が「国民学校」と改称。新聞に「開戦」の文字と「日本兵の頭骸骨を見ているアメリカ人少女」の写真が記憶に残る。残酷なアメリカ人を意識づけようとしたのではないかと思います。

真珠湾大勝利の蔭に、特殊潜航艇に2人ずつ乗り込み、特攻として真っ先に突っ込んだ「九軍神」の活躍があった。「九軍神」の快挙をたたえた歌を学校で踊り歌った。しかし、10人ではなく9人とは？おかしいと思った。戦後、10人中1人は捕虜となりアメリカへ送られたと知った。



電灯器具も暗く『浜松大空襲』
戦災を考える会刊

1942年（昭和17）熊本・食料品不足へ

1年で転校。デパートから食料品が消えていった。

1943年（昭和18）運命の浜松へ

父は中国の漢口へ転勤。家族は父の故郷の浜名郡飯田村（現浜松市）へ。飯田村国民学校へ転校。学校には軍隊が泊っていた。任務は、天竜川の堤防沿いの防空壕作り。すでにこの時、本土決戦・遠州灘からの敵の侵入を想定していた。

昭和18年後半の国民学校は軍事教練一色だった。金属類の供出。馬・鳩・犬まで供出。ピアノを弾けば『非国民』『パパ・ママ』は敵国語。使えない言葉にとまどったという。

1944年（昭和19）食糧難・東南海地震・空襲初体験

雑炊・スイトンの日々。最後は、醤油もなくなり、味がついてないものを食べた。

12月7日、教室にいたらいきなり大揺れ！東南海地震、マグニチュード8.1。飯田村国民学校で3名死亡。余震がひどく、眠むれない。震災の後、空襲が始まった。12月27日、飯田村国民学校と飯田村役場が全焼。寺や神社などでの分散教育でしのいだ。



浜松上空を飛ぶB29『大空襲 郷土燃ゆ』静岡新聞社刊 藤井尋造氏撮影

1945 年（昭和 20）空襲の激化・浜松大空襲

アメリカ軍は、飛行場・天竜川の鉄橋・軍需工場などの爆破・焼失をねらった。自宅が、飛行機プロペラ製造のヤマハ工場の近くだったので、よくねらわれた。

学校の帰りに機銃掃射。襲ってくるパイロットの顔が分かる！爆弾・機銃掃射・焼夷弾は、日常茶飯事だった。

6月18日の浜松大空襲。川は、死体でいっぱいになった。

死体の上を飛び越えながら駅へ急いだ時、かわいそうとも、気持ちが悪いとも思わず、人の死に無関心になったと、語る友もいた。



艦砲射撃の弾はぎざぎざ『空襲』浜松空襲・戦災を考える会刊 『浜松大

焼夷弾は恐怖！それ以上の恐怖、艦砲射撃！

夜中、今まで経験した事がない振動と爆裂が始まった。何が起きているか分からなかったが、照明弾で照らされている中、防空壕へ飛び込んだ。

爆弾が落ちるたびに30cm位飛び上った。蒲団を頭からかぶり家族固まってしのいだ。静かになったので、防空壕から出ようとしたが、出られない。防空壕の上に積もった土をどけて、やっと出た。外は、裂けた生木と硝煙の臭いで充満していた。この臭い、今も忘れられない。

家はかろうじて建っていたが、建具などすべて飛び散っていた。大黒柱は、ぎざぎざに大きくえぐられて、やっと立っていた。家の中にいたら確実に死んでいた。



焼け跡の浜松復興記念館蔵

軍艦から2,200発の砲弾が撃たれたのだ。焼夷弾は怖い。それ以上に艦砲射撃の恐ろしさはものすごい！人心は一変した。空襲の防空要員に残されていた大人たちも先を争って疎開しだした。

終戦の詔・軍国少女として死を決意

8月10日、母の実家熊村（現浜松市天竜区）に疎開。すでに10世帯40人が疎開していた。1部屋に1

家族配当。熊村国民学校は浜松からの疎開者であふれていた。

8月15日、ラジオでの天皇陛下のお言葉はよく分からなかった。叔父が「降伏」といったので、アメリカ軍が遠州灘から上陸と思ひこんだ。軍国少女として身の処し方を考え、蔵に入り、自分で膝を縛り、叔父に殺してくれるよう頼んだ。叔父がなだめてくれたので今がある。

戦災孤児や傷痍軍人の群れ・語り部として

1950年代にも、戦災孤児や傷痍軍人の群れをよく目にした。多様な価値観・飽食・無感動の世なればこそ、かつて戦争があったことを、かつて死が隣りにいたことを若者に伝えたい。